ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18279714

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ショウ霊, 無理矢理

ショウくんのターン。特殊なお道具使ってます。楽しい。ヤクザと元愛人パロです。みんな失踪した師匠が悪い。のかもしれません。

詐欺師のスティグマ　6

「そろそろ、包帯はいい」
将がミトン包帯を取り替えようとすると、そう霊幻が言い出した。
「爪に軟膏を塗って、絆創膏を貼るだけがいい」
「……アンタがそれでいいなら。でも、痛いぜ？指は自由になるけどよ」
「……いい。たのむ」
「……わかったよ」
将は左手の包帯を外し、ガーゼに剥離液をたっぷり染み込ませる。
「……っ！」
ペリ、とゆっくりとガーゼを剥がすと、痛みに霊幻が顔を歪めた。
ペリ、ペリと一本ずつ指を解放していく。それぞれの爪が、少しだけ生えてきているのが見えた。
ガーゼを剥がしきって。
ぐーぱーと握って広げようとした手が、途中までしか曲がらないし伸びないのを、霊幻は冷静に見ていた。
「……リハビリすりゃ、今まで通り動くようになるさ」
「そりゃーありがたいな」
にこっと笑って嬉しそうに言う霊幻に、将はぶるっと身震いした。
「アンタもう実は……狂ってんのか？」
「ん？なんだ、急に」
指先に軟膏を塗ってもらい、その上から大判の絆創膏を貼ってもらいながら、のんきに霊幻は返す。
「これだけ傷つけられて、毎日犯されて、なんで正気なんだよ。逆に怖ぇぞ」
「相手がお前たちだからかなぁ」
将はドキっとする。超能力者への差別。それが霊幻の口から飛び出すのは、あまり望ましくなかったからだ。

なにせこの話は、茂夫も聴いている。

「最初に知らないチンピラに服剥かれたり爪取られた時は、どうなることかと思ったけど、そのあとはモブとか芹沢とか昔馴染みのオンパレードだろ？可愛がってたやつらに冷たくされるならまだしも、好きって言われて、絶望、発狂しろってのが無茶だよ」
しかし予想とは違う理由に、将の肩の力は抜けた。
「まぁ昔はお前らがおれに欲情するなんて有り得ないと思っていたが……エクボが口火を切っちまったからなぁ。できるとなったら、そういう気分になっても、しかたない、だろう。知ってるか？生徒が教師に恋愛感情を抱く確率って、10パーセント以上らしいぞ」
右手のガーゼがゆっくりと剥がれていく。
しゃべりながらたまに霊幻は顔をしかめていた。
「でも犯されるのってさ……知り合いの方がいやじゃね？」
「なんでだ？多少なりとも融通してもらえる分、おれの拷問役がモブでよかったと思ってるぞ。それにレイプの加害者の顔見知り率もひっじょーに高い。合理的に考えて、知り合いの方がまだ納得いくだろ」
「……やめた。アンタと話してたらアタマくらくらしてきた……」
常識的な素振りで、非常識を語っている気がする。
将はこのまま言いくるめられたら、認識がおかしくなりそうだと思った。
１つ分かったことは。
この無能力者の考え方が、思っていたよりもタフだと言うことである。
「オレさぁ。アンタで勃つ自信が無かったから、ガチの拷問道具持ってきちまったんだ。ごめんな」
右手の絆創膏も貼り終わって。
申し訳無さそうに、しかし残忍に将は告げる。
「でも大丈夫だぜ、大将」
ニヤリと笑って将は霊幻の耳元に口を近づける。

ヒトコト『助けて』って言えば、ウチの最終兵器が助けに来てくれるからさぁ

ぼそりと言われて、霊幻の目が見開かれる。
拷問による心理戦も、いよいよ佳境に入ってきていた。

※※※※※※

「ショウくん、キミいい趣味してるね〜」
ニセ霊とか相談所の施術室のベッドを改造した、拘束ベッド。
それに霊幻は首、両腕、両手首、腰、太もも、足首までガッチリと革ベルトとチェーンで拘束されていた。
もちろん裸である。
「暴れられっとあぶねーからさぁ。腸を破いちまう」
コードのついた銀色のバイブのようなものをカバンから取り出しながら将が言う。
「なんだ、それ……。……、！まさか！」
「おー、知ってたか、霊幻さん」
ぱち、と通電させて、その銀色のバイブのようなものの先端を将は触って確かめている。
「コレでナカから前立腺に電気を流す。イきまくって死ぬほどつれぇらしいぞ」
「……なぁ〜ショウくん、５人もの男をたぶらかした身体に興味ない……？」
「あんまり」
「クソッ！」
悪態をつく霊幻。往生際が悪かった。
銀色のバイブのような部分に潤滑剤を塗り込み、将はゆっくりと拷問淫具を差し込んでいく。
「痛かったら言ってくれよ。死なれたら困る」
そう言いながら、手元のスイッチをオンにした。
「ぁっ」
ぱち。ぱちち。体内に直接電流を流されて、ビクビクと霊幻の身体が跳ねる。
「ぅあっ……あ、ぁあっ……ん、ぐぅ……っ」
はぁはぁと息が荒くなり、ガチャガチャと拘束具とベッドを繋いで

いる鎖が鳴る。
それだけでもかなりの責め苦だったが、
「お、ココか？」
先端が前立腺をかすめた瞬間。
「あ゛あ゛あ゛あ゛ーッ！！！！」
霊幻は絶叫した。
反り返ってめちゃくちゃに暴れようとしている身体を、なんとか拘束具が怪我をしないようにおさえている。
「あ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛、あ゛ーッ！！！！」
見開かれた目からぼろぼろと涙がこぼれる。
強制的に味あわされる強烈な射精感に、霊幻は脳が焼き切れるかと思った。
もう何度も射精し、勃ち上がったままの霊幻の性器は泡をプチプチとふきはじめている。
「死゛ぬ゛ぅ゛……イ゛キ死ぬっでぇ゛……」
「死なねー死なねー」
カチと将が出力を上げて。
獣みたいな声が霊幻から出始めたころ。
「なぁ、モブのししょー。……アンタ知ってるだろ、エクボ社長の行き先」
ボソボソと耳元で将がささやいた。
「しっ……知゛ら゛な゛い゛……っ」
ぐしゃぐしゃの顔を振る霊幻に。
「あっそ」
将はまた出力を上げた。
グリんと霊幻は白目をむいて、泡を吹いて気絶した。

「……」

将はズルりと拷問淫具を引き抜き、黙々と拘束ベルトを外していく。
色の白い霊幻には、ベルトの跡が化粧のように紅色に残っていく。
（綺麗だな──）

そう思ったのが運の尽き。
（嘘だろ。……勃った）
ごくりと将は喉を鳴らす。霊幻は無防備に横たわっている。
（……ぱぱっとヤって出しちまおう）
それが仕事でもある、と将は自分に言い聞かせる。
気絶している霊幻の足を持ち上げ、ずぶずぶと自身を埋める。
「ん……」
意識のない霊幻がぴくりと反応した。
（うわっやべぇ、中とろとろだし、ひくひく締め付けてくる）
無体になぶられた霊幻の中は、将の意識をすぐ持って行った。
「ハァッハァッ、ハァッ……うっ……」
ぱんぱんと腰を打ち付けて、じわぁとナカに染み込ませる。将が果てても、すぐうねる霊幻の内部が勃たせてきた。
（貪欲な壺かよ……ッ）
思わず将は昔遊んでいたカードゲームのチートレベルのカードを思い出す。
「やべぇ、ハマりそ……っ」
単純に。
霊幻は名器かもしれない、と将は思った。

※※※※※

「いやーひっさびさにビュービュー出た。プロのねぇちゃんより出たかも」
「ちょ、ちょっとショウ！」
あっけらかんと情事の報告をモブにする将に、律は慌てたように制止の声をかける。
ピクっとモブの眉が上がったからだ。
「かなり拷問具の出力を上げてみたけどよ、ゲロしねぇで気絶したぜ、あいつ。……根性座ってて、ちょっと気にいった」
モブの目がすわっていくのに合わせて、ごごごご、とホールが低い音を立てて揺れる。
ま、これぐらいでやめておくか、と将は口を閉じてモブの言葉を

待った。
「……まだ師匠の精神を全然崩せてない。当然の結果だよ……まんまと手玉に取られたショウくんのことは置いておいても、ね」
かちんときた将はモブを睨み付けたが、自分からふいっと視線を逸らした。勝てない喧嘩は、流石にしない主義だった。
そもそも将は、兄に引きずられるようにヤクザになった律が心配でここにいる。少しでも律の腹いせになれたのなら、それで良かった。先日、兄に本当の気持ちを言えなかったことぐらい、将はお見通しだったから。
（自分で犯させたんだろーが。その結果俺たちが霊幻に興味を持ったって、自業自得だろ）
ち、と将は顔をそむけたまま、舌打ちした。
「それにしても、師匠の精神崩せる気がしないなぁー……」
はぁー、と息を吐きながら、茂夫は両手で顔をおおう。
「さすが師匠」
だが手を退けた顔は、晴れやかに輝いていた。

※※※※※

その日の夜。
霊幻はパジャマに着替え、ニセ霊とか相談所のソファーベッドですやすやと眠っていた。

その空間に、1人の男がテレポートしてくる。

男はほっぺに赤い丸を、浮かび上がらせていた。

続